

遠山奇談後編

江戸時代後期、寛政十（1798年）初編刊、享和元（1801年）後編刊（錢屋利兵衛・華箋堂）の読本。

材木伐採のため、信濃、駿河、甲斐、遠江の山中に分け入ったときの奇談ということになっているが、少なくとも戸隠の部分は「本朝俗諺志」（1746年）の該当箇所とかなり重複する。ただ「遠山奇談」には田村將軍の話などが付加されている。

後編卷之四

○第廿二章

戸がくし深山に靈
現あらたなる事

六月中旬戸隠大明神へ参詣せしが。社地の山さへ大山なるに。後に戸がくし山とて。峨々たる大山を覆ふて。いと物すごきさまにてぞありける。奥院十二坊。中院廿四坊宝光院十七坊。合して五十三院あり。中院比丘尼石より女人禁制也。社中にふしぎなることあり。本社のならびに九頭龍王の宮とてありしが。是を龍の窟と稱ず地主は九頭龍

権現ごんげんと申。世よに生神いきがみといふて。人恐おそるゝこといはん方かたな

く。龍権現りやうごんげんハ。一ヶ年四十石の御供米ごくうまいを附置つけをかるゝに。毎夜まいや

三升さんしょうを炊かして飯めしとし。御供所ごくうしよにて是これをとゝのへ。内陣ないじんに備そなふ

るに。一粒りゅうものこらず。なくなる。又願望がんもうの人ありて。

梨子なしを供くうずるに。是これを食しよくせらるゝをと。社やしろの外ほかまでも聞きゆ

る。いかにも生神いきがみにして。いとおそろしく。神体しんたいハ龍りやうの頭かしら

ばかりなりといふ此龍神のからだハ越中の国にありて北方黒水龍の宮と稱ずるものハ戸隠の龍のからだなりといふ。さて此戸このとがくし

の奥院おくのあん大日だけが嵩たけといふより。絶頂ぜつてうにいたりてハ。六月朔日

より。七月中旬までのうちのぼること也。時しも六月中旬

あまりなれば。案内案内をもとめて。山のぼりに登のぼりしが。奥ノ院おくのあんハ大

日だけが嶽だけといふて。坊ぼうより七里あり。此間こゝに拜所をがみしよ十三ヶ所あ

り。五里ごりほどゆけば。小池せうけつといふて清潔しみづの清水湧池わくいけあり。

径わたり四五尺斗はなはにて。甚きよだ清きよし。此所こゝより外ほかに。水みづ一滴てきもな

し。しかし此池こゝにハ。鼓蟲まひまひむしのやうなる黒くろき虫むし。一面おほに覆おふ

て。清水せいすいを見せず。しかるに此水このみづ飲のんと思おもふ時ときハ。あたり

に有ある。葭茅よしかやをもつて。此水このみづをあたへ給たまへといふて。水みづ

中に丸まるく。輪わをか。さすれば此こゝむし四方しやう八方はつへわか

て。暫しばくの中ちゆう。印しるしたる輪わだけハ清水せいすいを頭あたまはし潔けつき水みづをみ

る。其所を汲くみえて飲のみこと也。しかし幾人いくたりにても。獨りひとく
此ごとくにする。水を望のぞもの一人相濟すめバ又虫羣むしむらがる故ゆへ。
人々別々べつべつに輸わをかきて。水を汲くみとる也。是甚はなはだふしぎなる
事。奇といふべし。又妙めうなるハ。我喉わがのどを潤うるほす外ほかに用意よういがま
しく。貪欲どんよくに汲くみえんとする時ハ。虫むしさらに退のか。たゞ其時
乾かわをとゞむるだけのこと也。是亦妙めうといふべし。此所迄五
里の間。休所やすむところなし。是より松原七里。劔けんが嶽だけといふ難所なんじよに
かゝる七里松原といへども。四十町餘にて六丁一里なり。これ絶頂也左右の谷より、五葉松生茂
り。此松小えだほそく藤蔓ふぢかづらのごとくにて。折れもせず。外
の木きにからみつき。藤ふぢのたなのごとし。此上を通りゆくこ
と也。それより劔けんが嶽だけへのぼる。誠まことに劔けんを立たてることくに
て。のぼりつめてたゞむ所なければ。直すぐに下くだる也。巔いたゞきの
みちハ魂たましひをけす斗也。これを暫しばく下ると。向ふに大日おほひが
嵩だけあり。石佛ごんたいの金胎こんたい兩部ふたの大日二尊そんあり。谷やを隔へて、拜おがむ
ゆへ。凡三四尺をがに拜をがまるゝ。其本へゆかバ。定て大仏なる
べし。崖岸がけさかしく。中く人の通路つうろあるべき。所にあら
ず。しかるに。常に霧きりふかく立こめて。二尊を拜むことあ
たはず。念仏かうしやうを高聲とにて唱へ。あつく信心をこめたる時

ハ。暫く霧はるゝゆへ。皆々信をとりて。念仏す。此所ハ中々嘲りうかべるものハなかりき。自然しぜんと信をとるやうになる。恐ろしき所也。念仏申せば。霧はれて。大日尊あらはれ拜し時ハ。げに恐ろしくて。わすれられず。ふしんといふも愚也。此上朝日夕日にハ。五色しきの雲。虹のごとく立。山中。のこらず。金色こんじきの光あり。是を來迎らいかうといふなり。つねは禅定なし。此山を他の山より眺のぞバ。山は碁石ごを布きたるごとく。されば此山深ふして。人跡せきまれなるゆへ。古しへ妖賊たてこも楯籠りて。民たみの害がいをなしたることあり。むかし坂上田むら丸。國家こくかを鎮しづめんとて。此山へも入て。妖賊ようぞくを平なげし時。迹にげさるものを追ひちらすに。終つひに遠山とをの深山しんへ隠かくれしを。穿うがちがして。終つひに退治たいせらるゝ。其時し椎河かわといふ大河。天龍りゅう川と打あふ所に。大蛇じや出て。田村將軍をめざす。これ世の害がい也とて。これも終つひに退治たいせられて。其印を石碑にのこさるゝことハ。すでに前編ぜんへんの遠山奇談とをやまきだんにくはしく記しるす。今ハ妖賊ようぞくなどすむ所にあらず。奇きなる靈山れいざんにて。心直しんちやくならぬもの。登山とうざんすれば。とかく路遅みちおそくて墓はかどらず。思ひの外にまよふて。日もかたぶきて。怪異くわいゝにおか

されたることを。いひつたへて。戸がくしハ恐ろしき山といふ。又たまく小池まで行て。渴うへにのぞみ水を飲のみんとすれども。小虫こむしさらずして水をあたへず。やゝもすれば頭痛づうとうして身体しんたいをなやまして。登のぼることあたはず。奇きなることゝいふべし。今は斯かくのごとくなれば。中々ちゅうぢゅう妖賊ようぞくなど、住すなすことと思おもひもよらず。怪異くわいゐなどに出いあふ人ハ。心正たせいしからざるゆへ。冥慮めいりよのとがめと思おもひ。つゝしむべし

註 1

「此龍神のからだは越中の国にありて北方黒水龍りやうの宮と稱ずるものは戸隠の龍のからだなりといふ」の「北方黒水龍」

とルビ。

註 2

「新日本古典籍総合データベース」の「遠山奇

談 他, 弘前市弘前図, 272-205-1, 刊, 寛政 10, 8

冊, マイクロ/デジタル, 100179631」(DOI

10.20730/100179631)。51 コマ目から 54 コマ

目。または富山大学学術リポジトリ、「遠山奇談

後編 (巻 4)」の 8 から 9 コマ目。

